

東南アジアで避寒する

(2017年2月15日～3月1日 14泊15日の旅)

高橋 節子

二月の町田は寒い。寒さに弱い私は、夫婦仲良く東南アジアに避寒の旅としゃれこんだ。広州経由で東南アジア各都市に行く格安チケットを手に入れることができた。アンコール遺跡群を見て国際バスでラオス南部に行き、また国際バスに乗ってベトナムのフエに抜けハノイから広州経由で帰国するという、ラフな計画を立てて出発した。

着いてみるとカンボジアもラオスも暑いなの、最高気温は35度近かった。日中は出歩く気になれず宿やカフェでぐだぐだ過ごした。10時間前後もバスに乗って国境を超える計画は早々にあきらめ、現地でチケットを三回も買い飛行機で移動した。

避寒はできたがそのほかは何しに行ったんだか・・・。

旅が終わって今でも心に残っているのは、風景や名所旧跡、名物ではなく、行った先々で出会った人たちのことだ。

まず、広州。空港で働く人たちが親切この上なかった。簡単に自分のスマホを外国人旅行者の私に貸してくれる。タクシーでホテルに行こうとしたが、近すぎるので乗車拒否。その後、ホテルの迎えの車に乗れるまで、三人もの空港従業員にお世話になった。誰もが最初から気軽に自分のスマホを差し出す。これでホテルと連絡するようと。

旅の最初に救いの神あり、幸先良し。



アンコールワットに向かう人々

二日目の午前、広州から飛行機で3時間、カンボジアのシュムリアップに着く。アンコール遺跡群観光の基地だ。

5件目に探し当てた安宿で出会ったのが日本人のSさん。そのゲストハウスの主のごとく昼間は入口の床にべったり座り、端末でネットを見たり、宿のラオス人と話したり、日本人客の相談に乗ったり、のんびりと過ごす。アンコール遺跡群が世界遺産に登録されたのは1992年、クメール・ルーージュを倒して新生カンボジア王国ができたのが1993年。Sさんはアンコール遺跡群観光ができるようになった頃から、この宿の客になったという。定年退職後は、毎年10月から5月までここで暮らしている。寒いのが嫌だから、と。すでにこの宿の家族同然だ。夕方5時には部屋に戻り、NHK国際放送テレビで7時のニュース(日本との時差2時間)を見るのが日課だそうである。

この生き方、いいね!

ラオス南部パクセの宿では素晴らしい上海人と出会った。

私たちが泊まった宿の経営者は日本人とか。食堂のメニューは全て日本食で、朝食もご飯にみそ汁の定食だった。昼時、そんな食堂の片隅で一人焼肉定食を食べている男性がいたので、日本人かと思ひ話しかけた。すると、上海から来た旅行者だった。

83歳だと! 長身で贅肉一つない。スックと姿勢よく立ち、身のこなしも軽い。黒地のTシャツに薄い色の細身のパンツ、カーキ色のポシェットタイプのしゃれたバッグを斜め掛けにしている。一人旅だそう。ホテルは現地に着くと自分で探し、トクトク(三輪タクシー)や徒歩で観光スポット巡りをする。ラオスは物価が安いから旅行しやすいと言う。翌日はバスで5時間かけて次の目的地へ行くそう。元気元気の源は日々の鍛錬にあり。上海では毎日10キロのウォーキングを欠かさないと。私よ



アンコールワット全景

りもずっと年上なのに、体力気力がみなぎっている。若い頃は化学製品を扱う商売をしていた。簡単な英語しかできなくてもこれがあるから大丈夫とスマホを取り出し、辞書機能や地図アプリを使うところを見せてくれた。WE CHAT(中国版LINEのようなもの、私も愛用)を使えば中国にいる家族や知人と簡単に連絡がとれ安心だという。ここまでスマホを使いこなす高齢者もめずらしい。

7年前四川省を旅した時の若いツアーガイドの言葉を思い出した。「中国の老人と日本の老人は定年退職後の生き方が違います。日本人は自分のためにお金を使って外国旅行もする。でも、中国の老人は、自分はどこにも行かずお金を使わないように心掛け、子どもや孫たちのために貯金する」日本の老人を数多くガイドして得た意見だろう。

中国に新しい老人が現れた、と思った。

パクセからルアンパバーンに移動する。昨年、同じ時期にここを訪れたので、勝手にわかる。昨年と同じ屋台で朝食をとっていると、相席になったのが関西から来た二人の大学生。彼女たちの話がよかった。

総勢40名でラオス・ルアンパバーン県の小学校にボランティアとして来ているそうだ。同じことを言っていた青年に昨年出会ったことを話すと、「SIBIO」という学生団体に属して活動していることを教えてくれた。SIBIOはラオスにすでに3校も小学校を作ったという。年に一度ラオスに来て、子ども達に文房具を渡したり、一緒に遊んだり、ゴミ拾



ルアンパバーン。朝の托鉢

いをしたりするそうだ。

ゴミといえば、ラオスはどこもゴミが散乱している。ほとんどがプラスチックのゴミだ。プラスチックが土に還らないことを知らないのだろうか。ラオスは東南アジアの最貧国だが、かつて飢えで困ったことはないという。熱帯気候の自然と調和し、食料を自給自足で調達してきた。自然のゴミは、捨てるも土に還る。しかし、経済発展の結果、プラスチック類の品物が大量に出回るようになった。今までと同様の感覚で考え無しにゴミを捨てているのではないだろうか。

彼女たちがゴミ拾いをしていると聞き、私の見方を話した。SIBIOの学生たちは、子ども達と一緒にゴミ拾いをするだけでなく、紙芝居を手作りしてゴミの問題を伝えているそうだ。知識を伝え実践する。彼女たちの地道な活動がきっと実を結ぶに違いない。

ラオスで希望を見た。

シュムリアップで、ルアンパバーンで、一人旅の女子大生とも出会った。1か月、2か月と時間をかけ、東南アジアは言うまでもなくインドにまで足をのばして、じっくりとその土地と人を見て旅していた。屈託なく笑いながら体験談を話してくれた。

心に栄養をたっぷり蓄えて帰国したに違いない。2月の東南アジアでの避寒。出会った人たちの熱をたっぷり吸って帰国した。

あったまりました。

(写真は筆者撮影)